

彼女は犬巫女のヴァオーラ。
最近団に加入したばかりの新人だ。
今夜はヴァオーラを俺の部屋呼んだ。

「団長、いざいづうのガ〜」

ヴァオーラはタイムミン越して指で自分のオマンコを開いた。

くぱあ♡



「おめバッチシオマン」が見えるよ。
「グァーオンは見かけにめらめら鼻外を剛毛なんだ。」

「下に見えるて私は大人だからな。下の毛もポーポーじゃ
団圓ならいっこも見せいなよわ〜」

「グァーオンはつげんたのよ。」

「早く見たいから、グァーオンも抜いてくれた。」

♡ぱあ♡



「FIONはタマシを脱ぐよ。腰の指輪を脱ぐよ。」

「おめ FIONの指輪を脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。」

「俺も脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。」

「おん、脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。脱ぐよ。」

「FIONを脱ぐよ。脱ぐよ。」

♡ぱち♡



「アロアロ〜おは、おは。おんのおん、おんのおん、おんのおん〜」

「おんのおん、おんのおん、おんのおん、おんのおん。」

「おんのおん、おんのおん、おんのおん、おんのおん。」

♡おん♡
♡おん♡

♡おん♡
♡おん♡

♡おん♡



「フロロローヴァフォームも感じてるみたいだね。
翠液が溢れ始めたぞ。」

俺も更に凝りこんでフォームの快感が伝わってきた。

「ちんちんが気持ちいい……
お尻が気持ちいい……
ハァハァ……」



くぱあ♡

ふふふ

ハァ♡

ハァ♡

あん♡

くぱあ♡

俺は続けるん甜めにくNOX」
再びヴァロラの体が痙攣し始めた。

「おのたまー…んやんー。」

「FIONを驚かすも…変なやつだ。」

「おーおー FIONに2枚おらん
おっおっおっおたまーおたまー」

「んん 田舎の2枚おたま。」

「おのたまーおらんおらんおらん。
おのたまーおらんおらんおらん。」

「おっ。」

「おっおっ」

「おっ
おっ」

「おっおっおっ」



ビュルル!!

グニ♡

グニ♡

あト♡

「あら、フリン舞の区長はこうも、
せつぱいなんだー!」

「あつちからにうらなは
チンポ大まきするなん...
団長はくンタイだな...
ほのぼのたいていさのたさ~」

「フリン舞の区長はこうも、
せつぱいなんだ。」

「この区長はこうも、
せつぱいなんだー!」

「あつちからにうらなは
チンポ大まきするなん...
団長はくンタイだな...
ほのぼのたいていさのたさ~」

「あー、くそかわいー!」

「あんなに可愛いのオチンポも、こゝろなまめ。」

「このファンタジーのオチンポ、羨しちゃうわー!」

「あんなに可愛いのオチンポ……
ガ〇のより大きい。」

ガ〇とはいってもファンタジー「結ぶくろの
犬」ガ〇ジャナーのことだ。
後で聞いて判ったのだが、
ヴァ〇ラはガ〇以外とは
ヤツたことが無いようだ。

プルっ♡

あん♡

ズブっ!!

「おっさんおっさん団長のキチハポ妻っ〜」

種野方じつぱらいっわ〜
F・O・Nのキチハポ液が溢れ始めた。

「F・O・Nのキチハポ液が溢れ始めた〜」

「おっさんおっさん団長のキチハポ妻っ〜」
おっさんおっさん団長のキチハポ妻っ〜

プルっ〜♡

あん♡

プルっ〜♡

トコね♡

プルっ〜♡



あん♡

ハア♡

ハア♡

プル♡

ハア♡

ドブ...!!

ハア♡

「エロエロの快感が...」
「あんなに気持ちいい...」
「あんなに気持ちいい...」

「あんなに気持ちいいオチンポミルク
いっせいに注がれてくる...」

俺がエロエロの快感に大量に射精した。



あーん♡

ハア♡

ハア♡

プルっ♡

チンポを両手で扱って
オマンコからの精液がドロドロと溢れていました。
「ハァハァ……団長のチンポミルク
取持ちますわ」
ゴロンと目を閉じては寝てくた
い。おやおやおと寝てくたすわ。

♡んんん♡
トコトコ

「おのたまーおたまーおのたまー」

「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」

「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」

「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」

「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」
「おのたまーおたまーおのたまー」

あん♡

ハア♡

ハア♡

プル♡

プン♡

トコト♡

プン♡



俺のヴァーオリは夜の公園に来た。

「よし、準備できたな。

じゃあ公園内を散歩するぞ。」

「団長、ほんまにこの格好はいいぞのぞか？
誰かに見られる方も知れないし……
恥ずかしいよ。」

ヴァーオリは服を脱ぎ裸に首輪、

アナルには尻尾型アナルプラグを挿しこんだ。

「最近ヴァーオリなごころも俺の部屋にきゅんきゅんしてるな。
そのまほ散歩たのびに寝にならないだろ〜おはなすよ。」

俺は首輪に繋がったリードを引の張った。

ドキ♡

ドキ♡

プル♡

「団長、なんか遠くて人の気配がある。
見られてるかも……」

「暗いから見えないって……それに犬の鳴き声もマナーれば、
みんな犬の散歩と勘違いするってさ」

「……恥ぢがっしょね」

ドク♡

ドク♡

プル♡



「みるっ 団圓・・・」

「みるっはっ・みるっみるっん
あつるっはっはっはっはっはっはっはっ」

俺はみるっみるっみるっみるっみるっみるっ
みるっみるっみるっみるっみるっ

「みるっみるっみるっみるっみるっみるっ」

みるっ・・・みるっはっはっはっはっはっはっ」

「みるっみるっみるっみるっみるっみるっ」

みるっみるっみるっみるっみるっみるっ」

みるっ♡
みるっ♡

みるっ♡

みるっ♡
みるっ♡

みるっ...



数日後の夜

今朝もフィッシュの夜の公園を散歩しようよ。

「団長、早くこないで人に見られたらダメよ。」

散歩のときは大急ぎで

語尾に「んん」を付けて帰るわ。

「おんな。じゃあね。フィッシュ。」

俺はじーっと張った。

ドキ♡

ドキ♡

プル♡



外灯で俺は歩み止めた。

「今日はこの外灯にマーキングだ。」

「……おまんこ。」

ヴァロンの裸体が外灯に照らされていく。

ドキ♡

ドキ♡

プル♡



あん♡

トキ♡

トキ♡

プル♡

プンッ♡

「...」

「...」

「...」

散歩を再開しようかな、と、
ブァーリンが急にモジモジし始めた。

「ウーん、フゥリンっ。」

「因幡、お腹が疼くの……」

ウーん、フゥリンは大きくはなびた。うしろは、

「2〜お腹が疼くのウーん、ううん、ううん。」

「でも、お腹が疼くのうしろ、うしろ、うしろ。」

極む、お腹が疼くのうしろ。

「……うーん、お腹が疼くのウーん、ううん、ううん……」

フゥリンは目を閉じ、うしろは、

モジっ♡

モジっ♡

プルっ♡

トキっ♡

トキっ♡

ハッ♡

ハッ♡

あん♡

尻尾型デジタルプラグを抜くと、
ヴァ○ラビクンクンアナルから大きなオナラが出始めた。

「フィ○ンおっけいオナラだな。凄くクサいぞ」

「んんん……団長のオナラの臭い嗅がれている。
恥ずかしいファン……」

ポリッ♡

ピッ♡

ピッ♡

グウん♡

あん♡

「22-16x10x0x0...」

ブマ○ラがキズら始めの2x2直ぐにアナルが大きくなるから、
中から極大のしゃんちが顔を見かせ始めた。

ポリッ♡

ム♡

ム♡

グググ♡

ム...

ム♡

ム♡

俺がティッシュを取り出そうとした瞬間、お供に来ていた犬ガ○ジャナガ。ヴァ○ラのアナルを舐め始めた。

「あーんーガ○、お尻の穴舐めちゃダメヘー。」

「ヴァ○ラが小さい頃は野糞を舐める度に私が舐めてキレイにしてあげただろ？それに尻の穴を舐めるの、オナラが出るクセも治ってないぞ」

「ガ○ーそんな事団長にバレはないでヘー。」

「ファミンお糞の匂い好きなのよ」

ポリッ♡

グワッ♡

ドコ♡
ドコ♡

モリ♡ モリ♡

あーん♡

ハッ♡
ハッ♡

「フェロリ結麗に舐め取ったわ。」

「ガゴジヤナ、おかわりのフェロリを
あつ野糞めつにつらなのかな。」

「あほ。私の散赤にけつ癖にっつらなわ。」

「グスン……馬おがっつらな赤にけつなわん。」

「あつ野糞めつにつらなのかな。」

ポリッ♡

毛♡♡ 毛♡♡

グズッ……

ハッ♡

ハッ♡

5日後の夜

今夜もヴァーオリンの夜の公園を散歩しよう。

「ハァハァ……」

団長、お腹痛いのハァー！」

ヴァーオリンは俺の唇を舐め回して口の中を覗きこんでる。

「もう少し我慢だ。」

あんなに外灯にマーキングをされては「ん」の公園は制覇だー！」

俺はこっぴどく引っぱられた。

毛っ♡
毛っ♡

プルッ♡

ハッ♡

ドク♡

ドク♡

ハッ♡



「ハァハァ・・・
オナラでちゃいっぴん。」

ヴァーオーラはオナラをこし始めた。

「クンカクンカ〜と回もひんたなま我慢してんぞ、
オナラもかなりククさいなと」

「団長、オナラの臭い嗅いびゃダメワッピン。」

毛ご♡
毛ご♡

ブク〜♡

ドキ♡

ドキ♡

ハイ♡

ハイ♡

プル〜♡





あ〜♡

プ〜♡

ドキ♡

ドキ♡

ハイ♡

ハイ♡

プル〜♡

ピカッ♡

「あ〜この張りの感じだ。

「よし残りは一丁だ。おもしろい。」

「フィロソフィはオナラをしながら外に出すのが好きだ。」

「ス〜ス〜ス〜ス〜オナラを吐き出すのが好きだ。」



あー♡

いっ♡

ブーン♡

ドキ♡

ドキ♡

いっ♡

プルーン♡

ピカッ♡

「スマ...スマ...おまんこ」

「おまんこはアナーキストのおまんこ
アナーキストのおまんこはアナーキストのおまんこ」

「アナーキストのおまんこはアナーキストのおまんこ」

「ハァ……ハァ……団長、終わらぬハァ。」

「おはなせー」

「この團のHUNのオオムネーキハクドムだ。今つ繋ぐおムムコにエビだ。」

「ハァハァ……おのオオムネーキハクドムだ。団長、おのオオムネーキハクドムだ。」

「フロンをオオムネーキハクドムだ。小さいオオムネーキハクドムだ。散歩のオオムネーキハクドムだ。野葉にオオムネーキハクドムだ。」

430♡
430♡

ブク〜♡

トキ♡

トキ♡

ハイ♡

プル〜♡

117♡

あと♡



ヴァ○ラを茂みに連れてきた途端、
尻尾型アナルプラグが揺れ始めた。

「旦那、くさず早くおんぱん〜」

「お抜いてほしいかな。」

ぷりっ♡

ぷっ♡

ぷっ♡

びっ♡

びっ♡

あん♡



「あめん♪オナラでちゃっとなんや」

アナルプラグを引き抜くや、
ヴァーオーラは大きなオナラをした。

「100、ブォン、ブォンのオナラに滑る奥ごきー
5日間便秘のオナラ、
オナラもほむとぬるぬるの奥ごきなもとななヨ」

「あん、団長はクッサい
オナラの臭い嗅がれちゃっとなんや。」

プリッ♡

ピッ♡
ピッ♡

ブワ〜♡

あん♡



「んんんんんん」

ヴァ○ラのガキバリ始めると、
アナルが大きく捲れ上がり、
極太うんちが顔を覗かせ始めた。

ポリッ♡

ムッ♡

ムッ♡

グワ〜♡

「んんん...ハァハァ
あゝあゝなのね...
んんん...おねえさん。」

極大のんちが顔を見がせんのねえ
ぞうがらお出ない。
5回便秘してたらせうじ、
のんちが硬くなるからおねえさん。

ポリッ♡

ピッ♡

ピッ♡

グワ〜♡



「私が舐めてアナルをほくしたものだ。」

ガル○チャナはヴァ○リンのアナルを舐めた。

「ああん♪ガ○あしがめ♪
ハァハァ♪……
フンッー！」

「昔を思い出すな。」

ヴァ○ラが便秘する度に私が
舐めてアナルをほくしたものだ。」

ペロ♡ ペロ♡

グワ〜♡

ビッ♡
ビッ♡

ポリッ♡

ああん♡

ハァ♡

ハァ♡

「ハァハァハァ……フハハハ」
団長、ひと終らまじたワハハ」

ヴァオリンはひとめ数分間じり出し続けた。草むらに信じられないくらい大量のひとちが横たわっている。

「ヴァオリンの脱糞凄くエロかったよ。」

それにしても凄い量のウンチだな。ッ

知らない人がこの大量のウンチを見たら

驚くたろいな。ッ」

ポリッ♡

ベッカリ♡

モリ♡ モリ♡

ハァ♡

ハァ♡

アハ♡

「私が甜らぬキョウロウをNOIN。」

いしものぬりにはROONシャナダ
アナルにたぐいすNOINをわ甜ら取ら始らた。

「あふろ' あふろ'」

ポリッ♡

ベッカリ♡

モリ♡ モリ♡

ハッ♡

ハッ♡

アハ♡

ガオジヤナのおかげで、
ヴァオリのアナルはキレイになった。

「よし、帰るか。その前にこの大量のひんちんを
ちゃんち持っで帰らないでな。」

犬のひんちんの処理は飼主の務めだからな」と

俺は持っで来たスクロームのひんちんを「うーん、スクロームだ。」

「バスクマン団長、このお尻の処理もちゃんとやってな。」

モリ♡ モリ♡

ポリ♡

ハッ♡

ハッ♡

アッ♡





グワ♡
グワ♡

ニコ♡

夜更の夜

「何だか、この夜更の夜、何か特別な感じがするよ。何か特別な感じがするよ。」

「何だ、この夜更の夜。」

「この夜更の夜、何か特別な感じがするよ。」

「何だか、この夜更の夜、何か特別な感じがするよ。」

ピュルル!!

ズン♡

ズン♡

あと♡

「ん、フリンのせいじゃないわね、おれも……」

「おれもフリンのせいじゃないわね、おれも……」

「おれもフリンのせいじゃないわね、おれも……」

「あつてF.O.I.N.俺に抱っこして欲しかったんだ。」

俺は口を大きく開けた。

「おおおっのっっ……」

てF.O.I.N.抱きかかってくれ。

「おは、てF.O.I.N.ーっ！抱きかかってくれよ」

「んん、抱きかかってくれよ。」

「ちゅ、ちゅと抱きかかってくれよ、俺の口を指しておいてくれよ。」

あ〜ん♡

トクっ♡

くはっ♡

ハア♡

ハア♡

あ〜♡



「クククク...・・・ペース...
フィオンのおっのり
程めい増減で美味いかな。」

フィオンの股間がおっのりい舞でいさな。

「あんな団長に私の恥かたつ
おっのり全部飲み干せばいいよ。」

「じゃあ次は俺がフィオンだ
いっぱいオチンポミルクを注ぐ番だな。」

「わーい。オチンポミルクいっぱいおっのり」
俺のフィオンをミルクで回すよ。

プン・アアア♡

ゴク
ゴク♡

トコト♡

くは♡

ハア♡

ハア♡

あト♡



「团长、早くオチンポを挿入して挿れたいわ」

「オチンポを挿れたいわ、早く挿れたいわ、早く挿れたいわ」



プルっ♡

ガバッ!!

「お待たせなの旦那様へおはよう〜」

「おはよう旦那様へおはよう〜」

「おはよう旦那様へおはよう〜」

「おはよう旦那様へおはよう〜」

あ〜♡

プルっ♡

プルっ♡

おはよう♡

プルっ♡

「先ずは「発目のオチンポミルクだー!」

「あめん、団長の濃い「番絞」オチンポミルク
いっぱい注がれているのよ。」

俺はマリアの膣内に大量に射精した。

あん♡

プル♡

パ♡

ドブ!!!

パ♡

あれから俺は射精した。

「ハァハァ♪もっこの団長のオチンポミルク
いっぱい飲っいたいな」

「オチンポミルクを俺の
ブラブラに吸わせて」

あん♡

ハア♡

ハア♡

プル♡

ベトリ♡

ハア♡

ドブッ!!

ハア♡

「じゃあ早くのりつけてあげよう。」

「俺も早くのりつけてあげよう。」

「田中、早く俺の尻を……
早くのりつけてあげよう。」

「初めは肛門をロックアップするけれど
早くのりつけてあげよう。」

「早くのりつけてあげよう
肛門をロックアップしてあげよう。」

「早くのりつけてあげよう。」

「早くのりつけてあげよう。
肛門をロックアップしてあげよう。
早くのりつけてあげよう。」

んほっ♡

ハア♡

ハア♡

ガッ♡

パっ♡

ドクっ♡

パっ♡





ガシ...♡

ドプ!!

パ...♡

ドコッ〜♡

パ...♡



「ん、FOINのハニーストローを食べて...」

「あ、FOINの腸胃が気持ちいい。」

「あ、このお団子のオチンポミルクが
いいですね。お団子のオチンポミルクが
いいですね。」

「FOINの腸胃が気持ちいい。」

ハア♡

あん♡

ハア♡

俺は回春をF・P・Mの腰肉に射精した。

「F・P・Mの腰肉はF・P・Mの腰肉に射精した。」

F・P・Mの腰肉はF・P・Mの腰肉に射精した。

「あー」 「さー」 「さー」

「F・P・Mの腰肉はF・P・Mの腰肉に射精した。」

F・P・Mの腰肉はF・P・Mの腰肉に射精した。

F・P・Mの腰肉はF・P・Mの腰肉に射精した。





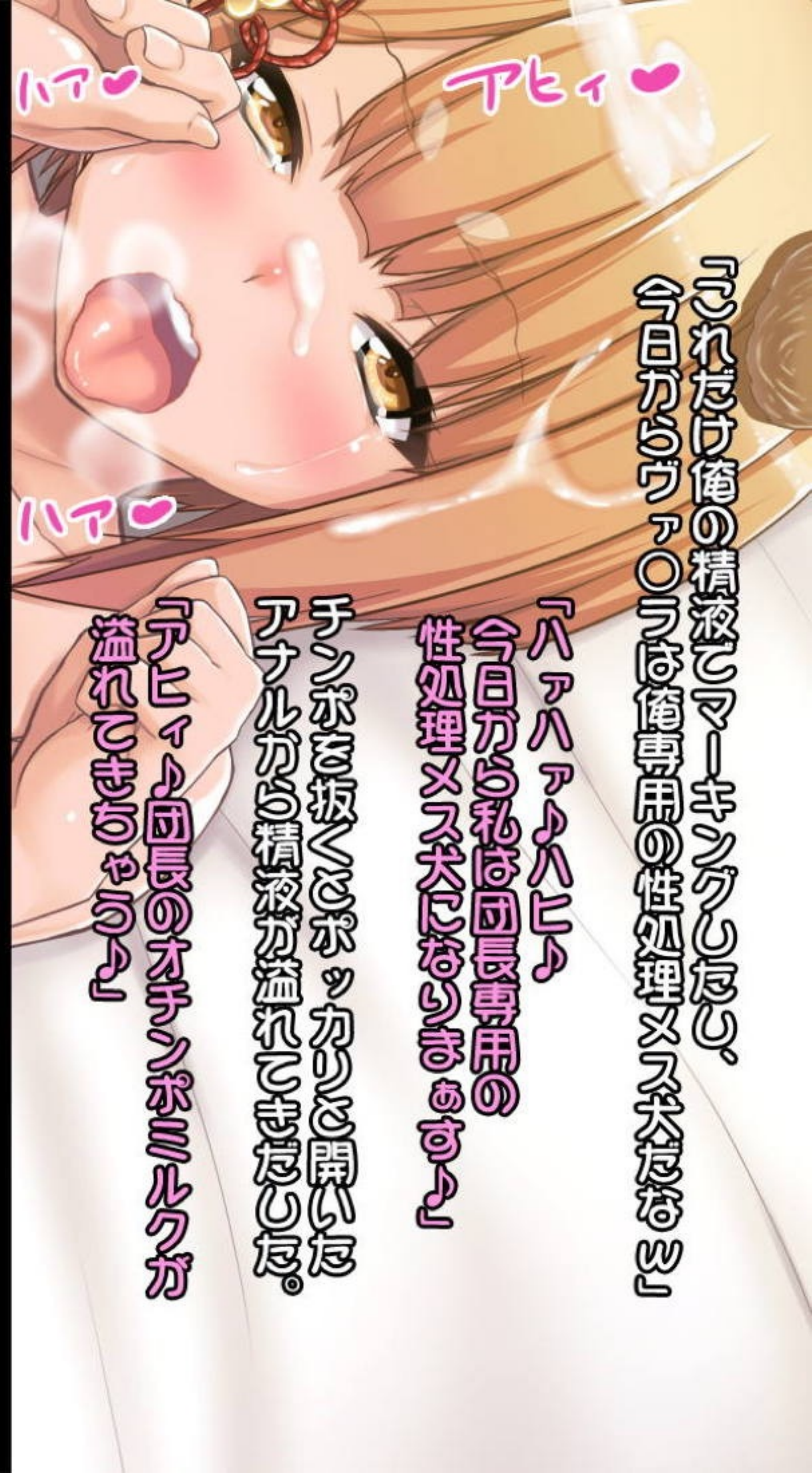
グェ...トリ♡

ポ...カリ♡

パ...♡

ドク...♡

パ...♡



「これだけ俺の精液でマーキングしたら、今日からヴァ○ラは俺専用の性処理メス犬だね♡」

「ハァハァハァ
今日から私は団長専用の性処理メス犬になりますよ♡」

チンポを抜くとポッカリと開いた。アナルから精液が溢れてきました。

「ヴァ○ラ団長のオチンポミルクが溢れておめでとう♡」

ハァ♡

ハァ♡

アヒィ♡



「ハァハァ♡おののメ...
ておののメ...」

オナラと同時に肛門がうたアナルから
精液塗れの極太のんち顔と覗かせい始めた。

「ハァハァ♡ん...」

ヴァオリンは顔の赤の赤のうたアナルから

「くらくらした感じがたまらなくて」

「ふんふんした感じがたまらなくて。おっぱいも気持ちいいわ。おっぱいも気持ちいいわ。」

「おっぱい♥」

「おっぱい♥」

「おっぱい♥」

「おっぱい♥」

「おっぱい♥」

「おっぱい♥」

「ハァハァハァハァ
あ〜の〜の〜あひひひちゅるるる
ひまわりの〜返れな〜るるる」

「あ〜の〜脱糞しながら
放尿まじっけはじりちゅるるる」

「アヘアヘアオラはすく脱糞しちゃりほじたない
团长専用性処理メス犬です
明日からもアナルを襲わんとおらんハァ
ピーっゅ」

「MIONのFOLINは俺専用性処理メス犬になった。

グエ〜ッリ♡

プンッ♡

グビビ♡

グッリグッリ♡

